明治三十一年十二月廿六日遞信省第三種郵便物認可
明治三十五年二月一日發行（毎月二回〔一日、十五日〕發行）

教政時報

第七十二號

目次

社說
慈善問題と勞働問題……
論說
危險なる風潮……文學士 和田鼎
社會
鑛毒被害地視察の記◎宗教法案◎教界彙報◎紛々錄
雜錄
先德餘香（其十）……文學士 本多高陽
飛花落葉……藤波一如
信界
自由の念……文學士 清澤滿之
教會の一夜……お茶の水人
讀者
遊三日誌（續）……東京 悅目庵

大日本佛教徒同盟會綱領

一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道德を涵養し品性を陶冶する事。
二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
三、佛教護持の責任を全ふし、健全なる宗教界を形作る事。
四、各宗僧侶を奬勵し、其學德を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
五、公認教制度を調査すること。
六、社會問題を講究して、慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を奬勵して、善良なる家庭を形作らしめ又社交を融和せしむる事。
八、積極的方針を取り、實業道德を鼓舞する事。
九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
十、社會に於ける一切の迷信を勦絶する事。
十一、殖民傳道を奬勵する事。
十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむるの策を講する事。

○政教時報第七十一號目次

社說……
◎鑛毒被害民の救濟法……
論說
◎道德的意志の養成（ハルバルト）……（楠龍造）
◎宗教者及び故郷……（多田鼎）
社會
◎鑛毒被害地視察の記◎軍人瀆職問題に付て某將軍談◎教界彙報
雜錄
◎臺灣の新年（承前）……（柴田常惠）
◎北京たより……（西山榮久）
◎永遠の生活……（赤松天鳳）
信眾家庭
◎育兒談（承前）……（文學士白山生）

本誌廣告

一、本誌は毎月二回（一日、十五日）發行とす
一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應せず
一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事但し郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全國
金貳錢五厘	金五錢	金三拾錢	金六拾錢	無遞送料

◎廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし

東京市本郷森川町一番地
發行所 大日本佛教徒同盟會出版部

明治三十五年一月廿一日印刷
明治三十五年二月一日發行
發行兼編輯人 百目木智鏡
印刷人 清水朝太郎

政教時評

慈善問題と勞働問題

人身に病氣あり、故に病理と治術の研究なかるべからず、是に於てか、古より醫師あり藥餌あるは、洋の東西と球の南北とを問はずして、然るなり、然れども病理や治術や投藥や、是決して醫師最終の目的にもあらず、又唯一の研究事項にもあらざるなり、醫師の目的職分にして、若し人身の健康を保全せしむるにあらば、病理と治術とを研究する前に當て、生理と衛生とを研究せざるべからず、人體の構造如何を研究せざるべからず、去れば換近醫師の目的は病理療病の外に生理衛生の學を講ずること、一大要目となれり、社會は一大機關にして、其構造大なる人身に比すべし、故に人體にして、生理と病理との研究を兼ね要すとせば、社會亦此兩面の研究なかるべからず、病理の研究面より怠るべからずと雖も、生理の研究は夫にも增して必要たらずんばあらざるなり、監獄改良や、囚徒教誨や、出獄人の保護や、不良少年の感化や、行路病者の取扱や、貧病者に對する施療施藥や、貧兒に對する慈善教育や、貧困者の無料宿泊や、鰥寡孤獨の救育や、軍人遺族の救護や、其他不時の天變地妖の罹災者を救助する等、假りに之を命名して慈善事業といふ名の下に總括し得べくんば、此慈善事業なる者は、是れ恰も醫師の病理研究や、治術投藥に當るものなり、是等の事業面より、隆盛ならしむべき必要ありと雖も、是と同時に其施設と研究とを怠るべからず、注意せざるべからざるは、社會上の生理的諸問題とす、勞働問題の如きは、生理問題の重なるものとす、近今歐米の社會に勞働問題の囂々たるは之れが爲なり、

大凡人は異常變態には注目し易くして、通常平態には注目し易からざるものとす、故に道德を說くものは、天下亂るゝ時の忠臣義士を稱揚し、家庭紊るゝ際の孝子節婦を褒美し、日常彝倫の公德等には思ひ至るは稀なり、戰場に奮鬪する軍人の功を著しく褒め立つれども、工場に日夜膏汗を垂らして働く職工、毒暑嚴寒をも厭はず、星を戴き月を踏んで働く農夫の功を稱する人は稀なり、故に學術は遠き天體の研究より始まり、近き地理や人體の研究は頗る後れたり、人體の研究も亦異常なる變態ある病理は疾く研究せられて、通常平態なる生理や人體の構造等は、漸く晩近の研究に屬す、社會に於ても亦然り、迅雷風烈異常の變災に際して、若くは鰥寡孤獨癈疾の者を救護する慈善事業は古昔より開け、何れの國も之れ有りと雖も、社會の常態たる生理を研究することは、極めて近年の創始に屬し、其發達猶幼稚たるを免れず、歐米の社會猶然り、我國の如きは最甚しとす、

見よ我國に於ても監獄改良の聲を聞くことは、已に久しく、現今猶不完全たるを免れずと雖も、之を舊幕時代の牢屋や行刑制度に比較し來れば、雲泥の相違あるべし、出獄人保護の業も諸方に起され、養育院、育兒院、施療施藥所、行旅病者の收締、感化法等の發布を見ると雖も（固より其實際事業の進步は

遲々として見るべきものなければ、其進捗を計るべきは勿論、なれども、勞働問題の如きに至りては、政府が工場法案すら、僅未だ提出もせざる有樣なり、議院内にも片言隻語も此重要なる事件に對する發言を聞かず、政黨も亦一時帳簿の付け樣など（今年の議會に政友會の財政案と政府案との如き是なり）には紛擾を極めて爭論すれども、未だ眞摯に斯る問題に頭腦を費せるを聞かざるなり、學者は世の先覺者を以て自任する者、又實際先覺者たらざるべからずと雖も、未だ是等の問題に對して、確乎たる斷案を下したるを聞かず、唯々近來一部の有志者ありて、我國の歴史をも習慣をも顧みずして、猥に同盟罷業等を奬勵して、直に米國流の解釋を試みんとする者あるのみ、是最危險なる次第にあらずや、然りと雖も、是れ亦止むを得ざる次第にして、我國に於ける諸般の制度文物は皆始めは飜譯的摸倣的にして、漸く進むに從て我固有の風俗習慣仕來等と同化するを常とすることは、これを唐制模倣の古に徵するも、又歐米文物輸入時代なる明治の實驗に鑒みるも、一の例外ども出さゞる事實なり、然れば勞働問題のみ惟り始より例外に一足飛の發達を許さゞるべきなり、去れば一部人士が直に歐米の制度を輸入し來て、飜譯的に模倣的に解釋せんとするは、強ち咎むべきにあらずと雖も、又是を以て足れりとして放任すべきにあらず、政府も政黨も學者も世人も、此問題に對しては、十分親切に熱心に研究して、我國俗に恰適して齟齬なき解決を下し度きものなり、若し之を漫然看過することあらんか、今日横溢しつゝある暗流は、如何なる勢を持ち來さんかも知るべからざるなり、政府は決して外形のみを見て、社會主義なり、撲滅せざるべからずなど、抑壓を力めて止むべきにあらざるなり、希くは邦人此問題に留意せよ、

論說

危險なる風潮

和田鼎

鑛毒問題の沸騰に伴へる幾多の現象中吾人の見て以て最も寒心に堪ゆずとなすもの三あり、曰く學生の大擧視察と路傍演說、曰く專門學者の冷然たる態度、曰く所謂運動と騷擾

凡そ世に動く可らずして然も輕々しく動くものあり、動かざる可ずして然も容易に動かざるものあり、共に其所を得ざるの點に於て其不可たるや言ふを俟たず、啻に其行動の不可たるに止まらず其社會に及ぼすところの影響の如き洵に測るべからざるの災害を生せざるを保せず、動と靜と緩と急と自ら其處に從ふに及んで初めて其効果の見るべきものあり、之を是れ圖らず、漫りに其分を超越して動く可らざるに動き其分を怠りて動かざる可からざるに動かざるに至る、圓滿なる効果遂に得て望むべからざるあり、吾人は前者の適例を學生の大擧視察に見、後者の實例を講義病に罹りたる現時の專門學者先生に睹る、

吾人は今更めて學生の本務につきて云爲するの閑を有せず

啻吾人は學生を以て凡ての點に於て未だ人の爲めに働くべき資格を有せざるものなりと言ふに止めんのみ、資を其父兄親族に仰き自家學業の勉勵に之れ日も足らず自家の本務のみを以てして尚且往々にして其重きに堪ゆざらんとす、何の遑ありてかまた他を觀るの餘地あらんや、明治現代の壯會、制度徒らに繁くしく運用の人之に契はず、當路は其責任の在る所を明かにせずして政黨の操縱に是れ日も足らず、政黨は黨派の利害と政權の攫取とに熱中して國家社會の休戚を思はず、百の正義は遂に一の運動にたも加かざるかの如きものあり、純潔にして熱情に富める學生が見て以て憤慨惜く能はずと爲し、情の熱するところ誠の溢るゝ所知らず識らず自家の天職を忘れて一臂の力を正義の上に貸さんとするもの、其同情の熱誠や洵に美といふべく、其公憤の氣慨や眞に賞すべしと雖ども、之か爲めに日本の後繼者として必須なる修養の時代を滅却するに至りては其本末を顚倒したるの譏は免かる可からざるなり、之か爲めに蒙むるところの災害や豈啻に鑛毒の比のみならんや、況んや現代の社會か如何に紊亂したりとするも、未だ學生の助を借らざる可からざる迄には至らざるなり、かの佛蘭西大革命時代の如き或は獨逸か那翁の羈絆を脱して祖國獨立の旗を擧げんとするか如き其に一國存亡の秋大學の學生か決然ペンを擲つて銃劍を肩にしたるは固より止むを得ざるに出でしのなりと雖ども、今の日本は決して然く存亡の秋に非ざるや言ふを俟たざるなり是と何れの點より見るも鑛毒問題の解決は學生の手を借るべき性質のものに非ず、また學生の動くべき時機にも非ざるなり、然れども吾人をして單に鑛毒問題につきてのみ言を立つるものとなすことなかれ、吾人の寒心に堪ゆざるものは學生が其本分を忘れて社會上の問題に狂奔するの一事にあり、今後の日本恐らくは有らゆる社會問題の簇生を見んとす、學生運動の風潮をして一度其傾を作らんか、學生の前途轉た杞憂に堪ゆざるものあらんとす、而してこゝに吾人の最も奇怪に堪へざるは教育ある思慮ある一部の人士が、なづ檄を學生に傳へて大擧視察の事を行ひたるにあり、人或は之を以て夫等の人士が居常唱導するところの社會主義の好箇の實例として、最もセンチメンタルなる學生を利用し、自家主義の擴張を爲し單純なる學生の腦中に社會主義を注入するの手段に用ひたるものなりとし、世の思慮あり識見あるの士に說きて現狀の視察を促ざずして、却て學生の如き若くは婦人の如き最もセンチメンタルの者のみを煽動したるは以て其證とするに足るべしといふものあり、吾人は是等の人士が純潔なる學生を利用し涙もろき婦人を刺嗾して自家の利を圖るが如き賤劣の士に非ざるを信ずるものなりと雖ども、社會問題の渦中に向て學生を投入したるの輕擧を難せずんばあらざるなり、若し夫れ學生が被害民に向て一掬同情の涙を灑ぎ一催のコンパニーを節して、其費を救助の一部に投じ當然屑屋の所得に歸すべき不用の衣を擲つて、寒さにむせぶ同朋に分つが如きは同情の美德を養ふの點に於て大に感賞すべきところ、之に向て毫末も非議すべきものなしと雖ども、社會問題に對して狂奔するが如きは斷々乎として其

不可なり早遅せずんばあらざるなり、

二、動く可らずして動く學生の不可なるが如く、動く可くして動かざる專門學者先生の態度は更に不可なるものあり、而してこゝに動く可しといふも必らずしも運動すべしといふに非ず、社會に起る諸般の問題に對して自家修得の學理を應用し、冷靜に之を考へ公平に之を判しよりて以て世の感情のみに左右せられて、輕々しく動き輕々しく止まるものゝ爲めに歸着するところを敎へ、單に感情によりて事を決せんとする危險なる風潮を警戒し、泰然黃白の爲めに動かす、嚴然尊貴に屈せず、淳々として學術の神聖を保つに至つて初めて學者の尊崇すべき所以を見る、聞く歐米の大學レクチューアマニアに耀りたる敎授連あり、と、今の日本の學者先生レクチューアマニアに耀らざるもの果して幾人かある、學生の敎授固より學者の最大任務なり、自家の研究固より其任なり、然れども更に一層の大なる任務はそが直接に社會の問題に明確なる指導を與へ世の溺たる愚者を警醒するの點に存す、吾人は不幸にして未だこの種の活學者あるを認むる能はざるなり、這般の風潮豈に日本の爲めに忠ひて悲まざるを得んや、鑛毒問題の如き工學者はまづ須らく自家の學理よりして鑛毒の豫防法を研究してその方法を發表するの責任なきか、經濟學者は珠算玉の上より打算して經濟上の解釋を發表するの責任なきか、醫學者は被害民につきて健康上の研究を就くるの責任なきか、敎育者は被害地兒童の敎育改善につきて救濟の方法を立つる責任なきか、その僅かに是あるは政府の依囑により

て爲したる某博士の健康診斷を裁判上の證券として依囑せられたる某博士等の土壤分析とあるのみ、何ぞ世の學者先生の社會民衆の爲めに冷然たる斯の如きや、素徒漢のみ徒らに喧噪するも問題の解釋には更に何等の進渉をも見ざるべきなり、啻にその解釋を見ざるのみならず、今後頻々として起り來るべき社會問題に向て貴民の騷擾モップの運動等を惹起し、平和の間にありてよく其圓滿なる解釋と見るべき底の問題に至りても常に運動の之に伴ふか如きに到るは、國家社會の爲めに最も恐るべき現象といはざるべからず、吾人は世の專門の學者先生に向て今少し人間につきて顧慮するところあらんことを望まざるを得ず、庶幾くは日本が學者を有するの名譽をして其實あらしめんことを、今の如くんば吾人は學者の化石したるに非ざるやを疑はざる能はず。

三、政黨の弊蓋し今日より甚しきはなくファクトルありてパーチーなく主義の如き節操の如き今や殆んどこれを政治家に求むるを以て迂遠の極となすに至る、茲に至りて吾人は政黨撲滅論を唱導せざる可らざるの歎あり、就中所謂運動と稱する一種の卑劣手段か百千の正義に勝るの効果あるに至りては遂に言ふところを知らざるなり、而して當路の士まづ之が先例を示し下悉く之に倣ふに到れりとせず更に僻の出つべきを知らざるなり、而して吾人の見て以て最も寒心すべきものとなすは、如何に正當の問題たりと雖とも運動と騷擾との二者によらずんば其解釋を見るを得ずといへる現象なり、今後諸般の問題が簇々發生するに當り一に運動となり二に騷擾と

なり止むを得ずして始めて之に手を下すといふが如きの勢を致さんこと是なり、而してこは鑛毒問題に於て明かに之を示して餘ありといふべし、當路の士にして若し果して今の如く責任の存するところを明了ならしめずんば、今後の社會は恐らくは運動又運動、騷擾又騷擾遂に其底止するところを知らざらんとす、是れ吾人の見て以て最も憂ふべき現象となす所以なり。

嗟嗚世の學生と學者と政府と政黨と共に皆其處を失す、鑛毒問題は解決の日あらん、這般の風潮今にして底止せずんば岌々乎として危からずや。

社會

鑛毒被害地視察の記（つゞき）

かくて谷中村の窮家を一々訪問し、眼藥、感冒藥を與へて之を慰さめ、去て小舟にて渡良瀨川を渡る、わゝ此の川、恐ろしき此の川よ、うが河底には如何なる魔神の姿をかくすぞ、暫らく水面を熟視して思はず粟粒す、向岸に達すればこゝは群馬縣、邑樂郡、海老瀨村字間田なり、視察者に便せんとにや左の二個の建札あり、

渡良瀨川の漁業

秋期「サケ」「マルタ」等の卵生期に當り、上下するものをマチ網を張りて捕獲し、一朝一ヶ所に於て能く一百貫を得たり、其他鯉、鰻、鮎の漁獲隨て多かりき

○

洪水の際は井戸の毒水あること數十日なるを以て、飲料水は遠き出水なき地より運びて之を用ゆるも、風濤荒らきときは止むなく濁水をも用ゆることあり。漸く毒水宅地を離るゝに及で隨て汲めば隨て出で淡渫を完することゝ能はずして之を用ふ

漁業に因て得たる利益の鑛毒の爲めに全く之を失ひたること、洪水の媒介によつて鑛毒の蔓延著しきことはこれによつて知るに難からず、行くこと半町ばかり、染谷又市氏の宅に至れば、田中正造氏夫人、戸外に出でゝ一行を迎へ居れり、夫人は正造氏を助けて專ら被害民の救助を計るため、昨今此の家に出張し居るなりと、一行は被害民救助のため若干の金圓を出して之を夫人に托して去る、行く行く窮家を訪問すれば、家人皆戸外に出でゝ厚く一行に禮し、且つ善後の計を懇囑す。哀れにもまたいぢらしき有樣なり、途に竹籤を過ぐ、試に其の小なるものを取てふるへば、容易にして拔くを得、更に大なるものを選で力を極めて之を上ぐれば、根は忽ちに拔けて竹は手に在り、且つ之の根を改むれば、宛かも一塊の土の如くして少しも根の張りたるが如きあとなく、所謂破竹の勢なんぞは樂にしたくも無き程なり、案内者に導かれて行くこと十數町、茫々たる廣野にして、只葦のみ、處々に茂り、白砂地上に堆く、歩むに踏みこたへなし、これ年々の洪水に河底より運び來るところの砂にして、此の中に劇甚なる毒鑛

を有せり、故に地面凡そ五六尺は鑛毒を以て充たされ居れりといふ、試に葦數十本を刈り取りて之に火を點ずれば、其色青きが如く黄なるが如く、普通の火色と同じからず、鑛毒の害豈恐るべきに非ずや、而して此の邊りに生へ茂れる葦は、從來より簾に織りて市に鬻ぎしを以て、これにより生計の道を立てしものも少なからざりしに、今は鑛毒次第に蔓延し、遂に葦の根の腐敗を來せしより、最早簾の用にも適しがたく、從て其の業を失ひ、路頭に彷徨ふもの少からざるに至るゝ、今此の邊の土地の沿革について質すに實に左の如しといふ

一期(無毒)。　無肥料にて桑種、蠶葉を作りし時代
二期(有毒)。　五穀育せず深根作物即ち桑の時代
三期(激甚)。　桑樹根生せずして蠶葉に侵掠せられし時代

而して海老瀬村全村に於ける被害の統計は左の如し、蓋し海老村瀬は界村、谷中村等と並で被害地中の劇き地方なり、

海老瀬村　一、七百四十町一反七畝十七歩　總反別

内

一、四十八町二畝九歩　高臺地
一、二百十八町一反一畝五歩　堤外激甚地
一、四百七十四町四畝三歩　堤内被害地

殊に海老瀬村中の字間田の如きは俗に大名耕地といひ、頗る豐沃の地なりしに、今や變じて不毛の荒野となり、十年以前までは戸數四十三戸なりしも、漸く廢絶離散して僅かに廿二戸を餘すのみといふ、

間田の窮家を一々歴訪し、進んで海老瀬村字峯に至りて、にても亦一々被害民を慰さめ、一村社を過ぎて權現沼に出づ、建札あり、

權現沼　面積五丁歩

非常に漁獲多く此の沼によつて生活せしもの少からず、十九人の水神講ありて、沼中數ヶ所に粗朶を切り込み、毎年十一月の比其の周圍に網を捲き、中に入て魚漁し、一日能く鯉五十貫、鰻四十貫を得たり、此の十九人のみ各期收漁後拾ひ漁を爲し、生活する者尚數人ありき、然るに今は魚族絶滅してその途に迷ふもの多し、

權現沼の裏手に村立の隔離病院あり、本派本願寺の有志より成れる佛教者同盟會は舊臘より醫師二人を派して、こゝに假病院を開き、被害地の患者を集めて、施療に從事し、昨日閉院して界村に向へりと、開院一週間中の受診患者總計五百○九名、患者には眼を病むもの、腸胃を損ふもの、並に婦人の乳に乏しきもの多く、此等の病は皆鑛毒の爲めに被れるものなりといふ、

これより字山口に出で、數家を慰問し、案内者の持ち來れる被害地圖を披き今更にうの被害の劇しきに驚く、山口は戸數百戸なりしも漸く減じて今は五十七戸となれりといふ、この村に大日堂あり、小高き地に位す、堂に上りて四方を眺むるに、眼に入るところ、悉くこれ茫々たる廣野、田に青色なく、人生氣なし、あゝ恐ろしき哉銅山の毒、大日堂の前に建札あり、

願眸中に容る民有毒地の面積

二百十二町九反九畝……谷中村堤外地
二百十八町一反一畝五歩……海老瀬村堤外地
八十一町七反九畝十二歩……川邊村堤外地
二十六町一反二畝二十九歩……新郷村堤外地
四十一町九反三歩……利島村堤外地

海老瀬村を視察し了りて、荒蕪せる田園の間を過ぎ、渡良瀬川に沿へる堤上に出づれば、こゝは埼玉縣北埼玉郡川邊村なり、此村は海老瀬、谷中に比すれば被害劇しからざれども、尚洪水の媒介によりて鑛毒の害を被ること少からず、田畑家屋皆被害の跡歴々として存せり、堤上札を建つ、

川邊村

鑛毒の爲め地力盡きて免租となる、公民權者なく村税收まらず一村維持の要素缺け一村無政府の姿となれり、

三十一年の洪水に堤防水中に沒して宛然數里の毒湖を造り運輸船をして堤上を自在ならしむ、一村破堤の個所四十八、流失家屋百廿七戸、

以て其の一班を知るに難からざるべし、これより歸途につき、四時十分古河發の氣車に乘して歸東すれば、一團の學生は、手に手に鑛毒問題學生救濟會といふ提灯を下げ路傍演説に人心を喚起せんとて、今まさ上野停車場前を過ぎつゝあり、

若しそれ被害民が窮狀を叙せんには、一々枚擧に遑あらず、試にその一二を記して以て筆を擱かんか、海老瀬村字間田に田代榮吉なるものあり、田畑四町二反二歩を有せしが、鑛毒被害の爲め漸次衰亡して、邸園田畑皆地人の有となり、あはつさへ當主榮吉憂愁の餘、家を出でゝ歸らざること一年、只一人の老母、頼むべき親族なく、議るべき身寄なく、泣くく其日を送りけるに、無情なる債主は遂に住み馴れし家屋より放逐せしかば、彼れは身を寄するに處なく、僅に請ふて雪隱を得、ここに起臥して以て雨露を凌げり、彼れ出でゝ一行を迎へ、縷々身の薄倖を歎きて、禮を厚ふして善後の計を懇囑す、あゝ昨は我が家、今は人の家、而かも目前に數十年來住み馴れし我家を見て、我は臭穢なる雪隱に住居す、彼れが心の切なさ、苦しさ察するに餘りあり、

同村字峯に村社あり、人家を離るゝこと數町、境内古杉老松の繁茂せる間に、いぶせき小屋がけあり、中に住むものは荒井ユリといひ、本年七十八歳の老女なり、家元と魚屋にして、相應の生活を爲せしが、鑛毒の爲めその途を失ひ、一族悉く足利町に移りてかすかなる日を送れるも此の老女獨憤墓の地を去るに忍びずとて、五ヶ年の久しき、只一人、此の一ツ家にわびしき住居をなすなり、と、老女が心中、豈悲哀の感なからんや、

同村に野澤要次郎なるものあり、畑の一隅に葦數百本を以て小屋を造り、土の上に小さき破れたる一枚の筵をひきてこゝに起臥す、また被害衰殘の果てなり、一夜寒に堪えず、枯

れ草を集めて小屋中にたき、そのまゝにして寢ね、忽ち脛部に大火傷を爲し、皮破れ、肉爛れ、骨露われ、藥の之を癒すべきなし、悲絶慘絶、豈誰れか同情一掬の涙なからんや、

一日僅かに數村を廻りて、此の慘狀を目擊す、若し數日を費して細かに被害地全體を視察せば、その悲慘果して若干ぞや、敢て勸む、飽食暖衣の人よ、肥馬輕車の人よ、一日都門を辭して一たび足を被害地に投せよ、同情の念は油然として卿等が胸奥に湧かん、

（完）　（會員　鐵腸生記）

宗教法案に就て

宗教法案は教界の一大難問題たるとは、今更らいふ迄もなき事なるが、此問題に就ては本會は素より一定の意見あるあり、何等の思考なく輕卒に取扱ふことは最も慎むべき事なり、

宗教法案か今期議會に提出さるゝや否やに就ては各地より續々照會中なるか、余輩のきく處によれば政府側に於ては彼の山縣内閣か一たび宗教法案に手を燒きし以來、斷然提出の勇氣なく、去らば此儘にて打過さんも外聞惡しく、常に躊躇の姿なり、殊に今年は總撰擧を目前に控へ居るを以て、可成難關問題に手を出さゝる覺悟なれば政府側より提出の事は十中七八迄は無き事ならん、然れども議員の一部には早晩制定すべき法案を何時までも捨て置くべきにあらずとし、既に成案を具し今期開會中是非法案を提出し現任期掉尾の大運動を試みんとする傾向ありと云ふ、それかあらぬか各宗委員七名去月廿六七日の頃相前後して東上せり、聊か此間の消息を傳ふべきか、若し法案提出するの時あらば、余輩は法案其者の精神如何によりて大に覺悟せざるべからず

教界彙報

◎宗教法案に對する各宗の運動　宗教法案を今期議會に政府案より提出すべしとの説あるや各宗より之か運動に着手し日蓮宗よりは田村法亮天台宗よりは中村勝契の兩氏を初め七名を選定し已に上京せしめたるか其他各宗の委員は去月下旬何れも着京せり

◎織田得能氏は彼岸無下より代議士に打て出てん説あれども虚説なりと云ふ

◎東本願寺新法主は老か主負傷の爲め歸山し病を勉めて看護の傍ら法務に從事し居れりと

◎天台宗僧都遠賀亮中師は從來布教にのみ盡瘁せしか今回上野一山の學務に與る事となれり

◎大谷派眞宗大學の講師齊藤唯信師は去月十五日立教開宗紀念會を丸山新町の白邸に催したり、當日の來會會は南條文雄、清澤滿之、戊石惠實、和田鼎、本多辰次郎、常盤大定等の三十餘氏にして、式場安置の宗祖眞影を拜して齊藤氏は開會の趣旨を述べ次て南條清澤二氏の演説もあり、頗る盛會なりし

◎去月京都妙心寺に於て各宗管長會議を開き、宗教法案、並に菩提會の件に付協議したりと云ふ

◎東本願寺の財政も著く劇新の歩を進め、敗年の間に二百萬圓の負債を悉く償却したる上に、更に五六百萬圓の基本財産を蓄積する意氣込なりと

◎山口縣萩町の萩婦人會は今より十年前佛教信徒の婦女子を團結して設立したるか、今年は恰も其十周年に相當するを以て、去月廿二日郡長警察署長其他有志者を招聘して祝賀會を開きたるに、非常の盛會なりし由、同地より通信ありたり、因に云ふ同會長は毛利忠愛公の未亡人毛利安子の方なりと、吾人は同會の益々隆盛ならんことを祈る

紛々錄

◎われ一日森川街の或洗湯に赴く、八九歳の少童湯槽の外にありて湯の加減を試み浴せんとして浴する能はず、他を顧みて救を求むるの情切なれども、他の六七の浴客流し場にありて喋々喃々敢て一顧の勞を取り、少童の爲め三助を呼んで水を請ふもの一人もあらざりき、斯くして世の人は慈善問題を知らずとして傍觀するを待べきか、借問す、社會問題を解せざると云ふ世の宗教家、其實際問題に遭遇して而も平然として濟し込むを得るや否や

◎奥村五百子の女傑たるとは人皆之を知る、五百子曾て廣島市に於て演説をなす時にあたり、鬼將軍佐藤少將も亦一場の演説を試む、將に壇を下らんとして、是より狂氣(きちがい)婆々奥村五百子の演説ありますと紹介して退きぬ、軈て五百子は演壇に進み佐藤將軍を顧みて只今「ドチンバ」の佐藤少將より紹介になりました奥村五百子でありますと將軍を睥睨して先の狂氣と云はれたるに一矢を酬ひしとぞ、人愈々其膽大に驚きしといふ、

◎新年に入りて市ヶ谷監獄署に於て男女二名の死刑執行ありたり、男は横濱市の滑川某と云ふ强盗殺人と云ふさくも恐しき刑名の者、女は松本そのと云ふ、埼玉縣のものゝ如何なる惡魔の魅入りしか、一少女を絞殺して懷中の物品を奪ひ去りし惡婆、うも彼等は斷頭場裡に上りし心地は果して如何、一死萬事休矣、死は凡ての罪より解脱せしむ、彼等は幸なる哉

雜錄

先德餘香（其十）

本多高陽

◎長生院智現師講　文政天保頃に越後に二大學者が出た、一人は是迄に已に御紹介申した、水原無爲信寺の香樹院德龍師で、今一人は此長生院智現師である、師は出雲崎淨立寺に住持した人で、師の方が香樹院師よりは稍先輩である、香樹院とは異りて其行狀などは頗る無頓着な磊落な方で有て、巡錫するにも婦人を伴はれたとまで聞いて居る、此人の法義相續心得十ヶ條といふが近頃越後國三島郡日越村の木村仁右衛門といふ人の手から、是真會へ投書せられたが、甚だ爲になることが多いから寫して御目に懸けやう、

一法義をすきこのみて、家職をなげやりにいたし、身の上をしらざるものあり、

二家職が大事なりとて、唯今生をおもとして、佛法をなげやりにするものあり、

三法義はよくさだまれども、王法仁義にかくものあり、

四王法仁義はよく守れども、法義はうとさものあり、

五佛法はよく聽聞すれども、報謝のつとめをなげやりにするものあり、

六參詣もよくいたし、念佛もひまなく申し、報謝のいとなみはあるやうなれども、安心の筋不分にて、或は異安心にお

ちいるものあり、七安心筋報謝はかけめなくいながら、御本山や師匠寺への懇志を、分限相應にはこばざる人あり、八懇志取持はよくいたせども、御法義筋なげやりにするものあり、

九法義を沙汰し、懇志取持はいたせども、名聞利養の心ゆゑに、他の同行の失を申立たり、法義取持の人をねたみ、又法義にことをよせ、他の金錢をとりたりするものなり、

十往生大事の心掛深くして、家職のはたらき油斷なく、身分に過ぎたる奢をせず、參詣供敬不忘王法仁義の道をたしなみ、家内和合し、近所隣の人にもねたまれず、地頭領主所の役人等のいひつけもかしこまり、他宗の人にもそしられず、内外睦ましく、法義相續してよろこぶ人これ尊し、

◎開華院法住講師　この人は能登の生れであるけれども、多くは江戸に居られたから、江戸講者と呼ばれた人で、一度は小石川の傳久寺に住職した事もある人である、其後又尾張名古屋の守綱寺と三河國寺部村守綱寺とに兼住せられた、其體格は大きく肥滿して居て、性質は嚴格で潔癖で飲水などは漉水囊で漉して飲まれたといふ事である、師は又餘程説教などは上手で有て、明治六年二月十五日名古屋の自坊に於て、今日は大聖釋尊の涅槃日であるとて、御涅槃の事を説教して居て、其場で俄に自分も涅槃に入られたと聞いて居る、

◎祐秀寮司　播州西木の西勝寺後藤祐護師といへば、大谷派で名高いのみならず、七里恒順師の滅後、關西で德行家といへば先づ此人であらう、其父の祐秀寮司は猶一層學問といひ德行といひ勝れて、近代稀有の智識である、人が呼ぶに名や寺號を言はずして、唯佛さん〳〵と言たものである、寮司は香樹院德龍師の弟子で、香山院樋口龍温講師と同門である、少年の時分から其行が衆に拔でゝ、何か龍温師と議論することがあると、龍温師は口吻で有て、寮司は辨舌爽かで有て何時も勝を占められる、併し後に深思熟考して見て、若しも自分の方が非理で有たと思へば、袈裟衣を着し念珠を手にして、叩頭して謝する、如何なる夜中深更と雖も思ひ付けば直に其通りにするのであるから、詫びられる方では眠いのを起されるので却て閉口したといふこと、書生時代に親密な同盜に對してソーいふ風故、老後の事は蓋思半に過ぐるだらう、業成てからは始終自坊に引籠て居て徒を集めて教授し、念佛を唱へて居られた

◎佛祖崇敬の事などは實に驚き入る次第で、御尊像から佛具を掃除するには、さいはらひ（東京地方ではほたきといふ）が實に三十幾本もありて、佛像の顔は顔で一本、手は手で一本、足部は足部で一本、机に一本、其他各尊像で用ゐるのが別であるといふ風で此多數になるのである、若甲人が佛に禮拜して居るに、乙人が其前を通過することは決して許さない、其越意は吾々人間同士でも相對して話して居る其中間を通るといふ失禮なことはない、況して佛に禮拜してる間を通るなどは言語道斷であるといふのである、其他萬事の心掛が此通り周到なものである、香山院が講師に成てから、師を唯寮司で捨て置いては

濟まぬから、一度高倉學寮へ來て講釋して呉れよと、再三促されても師は遂に故山を出ずず、一生寮司で終られた、（高倉學寮では、一度も學寮に出て講釋せぬ人は、如何に博學でも、講者職には上せぬといふ規則が、古來有るから、）

飛花落葉

藤波一如

梅花か風に隨つて飛べば、暗香蹤々として月却つて疑にむせぶも妙な現象で、桐葉風なきに落ると、天外の秋氣は一面に人寰の情事を包んでしまうも奇な事體である、落葉そのものに條理あるかドウだか、僕には未審の問題であるが、飛花なるものに意味ないとは、ドウしても思はれない、僕の飛花落葉は一片の閑文字に過ぎない、モト風情動靜の攝理だとか、叙事前後の調和だとか云ふやうな、所謂整然たる考案のあるではなく、風のまに〳〵に飛び散る梅花の、時に南枝北枝の定りなきやうに、風なきに落ち亂るゝ桐葉の、天候に餘義なくさるゝやうに、諸感無感無感諸感、亂たり散たりて、かの吉田の兼好と等しく、心にうつり行くよしなしごとを、そこはかとなくかきつくるまでのことである、ソーして何れか隨風の飛花やら何れか無風の落葉やらは、問ふに梅花知らず桐葉語なしであるから、これは見る人の心々に任すより外道はあるまいと思ふ

不立文字

單りこれのみに限つたことではないが、特に宗教上の文字を解釋しやうとするなら、身先づ其實驗自覺を試みた後で、其鑿痕斑々の下に活躍してある眞意義に觸着せねばならぬ、デあるから支那の古先生も、活眼以て活書を讀めと云つてある、ソウでなかつたならば、活書反つて眼目を病し、文字むしろ意義を失つてしまうだらう、ソコで活禪の偉物は、不立文字と喝破し去つたのである、不立文字と云ふのは不立文字の四字に着せよと云ふ意義の文字ではない、不立文字を喝破せる所以の眞意義を掬み取れよと訓示せる立文字なのである、宗教に向つて評言を試み、宗教を他に傳へんとする人々は、先づ讀經解文の間々裡に得らるべき氣樂な仕事でないことを自覺親試した後で、ゆつくりとやつてもらひたいものである、

美術と宗教

偉大なる美術家が宗教的熱誠によりて、永久不磨の功績を印せるもの多きことは、歴史上誣ゆべからざる著名な大事實であると同時に宗教と美術との關係が極めて親密なものであると云ふことを證據立てゝ居るものと思ふ、宗教とは具體的道德の理想の謂で、美術とは具體的情操の理想を云ふのである、即ち美術は美的理想を、宗教は善的理想を、共に具體的に實現されたものゝ表であると云ふのであるソコで宗教的美術と云はゞ、うの具體にせられた善的理想と、美的理想の具體にせられたものとの融合調和せる狀態で、更に或る形式を備へたものであることが解かるだらうと信ずる、即ち宗教的美術は、兎に角に絶對圓滿なる人生の理想を、相對陋缺なる現實の世界に、具體的に表彰せんと期するもので、時に宗教は美術の方法手段たると共にうの目的となり得べきものであるまいか、果して然らば僕は大聲疾呼して現今我國の美術家者流に向つて、宗教を慫慂すると同時に宗教的熱誠を要求せねばならない、

文學と宗教

宗教は盧山の如きものと思ふ、匡盧山、右より之れを望めば峯で、左より眺むれば巒である、宗教なるものも究むるもの〻見地によりて意義を一にしない、僕の先には宗教を解して、

具體的道德の理想であると云つたが、まだ斯うも考へらるゝのである、即ち宗教は具體的一個の哲學であるとだ、然しその根本の意義に至つては一毫の差もないことを忘れられては困る、ソウして文學なるものはドウかと云へば、これまた具體的一個の理想であると云つて不都合がなからうと思はれる、科學は推理的であるが、文學は宗教と同じく直覺的である、科學は理性に訴へて事物を批判するけれども、宗教と文學とにあつては、むしろ情緒に訴へて人生を愉ばせ人間を論すのである、宗教は論的の方で文學は愉的の側であつて、愉と論とは同一義ではない、即ち同一義ではないが、等しく人を教ゆる處あるに至つては合一さるゝのである、斯う云つたならば或人は科學も人を教ゆるものだと非難するかも知れぬ、然しこれはその教ゆる所以の差別を逸せるより來つた誤見である、が僕とて宗教文學同一論を主張するものでない、宗教文學一源二流の説を云ふのだ、ミルトンでありシルレルであり、或はユーゴー、エメルソンとやうに古來最大なる文豪を捉らへ來つて如何に文學なるものに宗教的生命を要するかは、今改めて論するまでのことではあるまいソコで僕は美術家に向つて慫慂要求せると同一筆法で、今の社會の文學者に宗教的の生命を献納せねはならない、去れはとて僕は抹香臭き宗教を傳へてアーメン的の宗教文學をものせよと云ふのではないのである、要は今の文士が、その道念を高潔にして眞摯の熱誠あるに至らんために、宗教の眞髄を實驗自覺して呉れたまへと請ふばかりであるのだ

信界

自由の念

清澤滿之

自由と云ふことは頗る珍重せらるゝことで、人間の幸福と云ふも、畢竟自由と云ふ一言にて盡さると云ふても差支ない樣である、然れば、人間には自由程大切なものはないと云ふてもよろしい譯である、然るに、自由と云ふことは、實際上には、其程大切なものであるのに、理論上に於ては、頗る怪しいものである、何故かなれば、自由と云ふことは、其に就て他の原因事情と云ふものを許さないのでありて、所謂因果の法則に合はないことである、然るに學理の上に於ては、因果の法則をはづれたるものがあると云ふことは、決して許されないことである、ソコデ自由と云ふことは、我々の實地の活動上に於ては、人世の最大要件であるのに、我々の學問の研究上に於ては、全く無根據の妄想であると云ふ次第である、古來學問上に於て、「因果の必然と意志の自由」と云ふ論題の提議せらるゝ所以は、此難局を解決せんとすることである、然るに、此難局は毫も解決せられないは、何故であるかと云ふに、大體論題の端緒が明瞭にしてないからである、先づ第一に自由なものは自在なものでなければならぬ、自在なものは獨立なものでなければならぬ、獨立なものは他のものに無關係なものでなければならぬ、無關係なものは絶對のもので

なければならぬ、絶對のものは無限のものでなければならぬ、然るに、因果は各相對なものである、有限なものである、互に相關係したるものである、互に相依て存立するものである、不自在なものである、不自由なものである、夫れ此の如く、自由と因果とは、互相反對して、決して相容れさるものであるから、因果の天地に於て自由のあり得べき筈なく、自由の原頭に於て因果の立ち得べき筈がない、然るに、不可思議なのは我々の實際である、實際に於ては、我々は常に自由の念に驅られて止まない、自由を望み、自由を求め、自由を得んと力めて止む能はざるは、我々の現狀である、而して、茲に最も注意すべきは、此の如き自由を、我々は實地に得たることがあるか否やの點である、自由の權利とか、自由の行動とか云ふことが説かれてある所を見れば、我々の中に自由を得たる人があるかの樣に思はるゝ、否、夫のみでない、自由と云ふことを、我々は生れ始めよりして得來りて居るか如くに思はしめられて居る樣である、然るに此は全く迷謬である、我々は決して自由を得ては居らぬ、我々の中に自由を得たる人はない、自由の權利だの、自由の行動だのと云ふのは、全く空言である、若し此の如き言句に惑わされて、眞に我々に自由と云ふことがあると思ふ時があれは、我々は極めて愼重に反省熟察すべきである、自由は我々の現在に得たる所にあらずして、只未來に之を得んと欲する希望のみであることを知るを得ん、而して彌我々の自由の念は未來に之を得んとする希望に過ぎさることを知れば、我々は始めて自由の念に就て正當の見解に達したることである、我々の現狀は四方八面共に因果に纏縛せられて居る、毫も自由の實行ある所はない、然れども、未來に向ふては、滿々たる自由の希望を有することである、此希望は我々をして現在に於て直に之を得んことを力めて止まさらしむる程に盛んなるものである、而して、我々が自由を求むるの熱心が增せば增すほど彌多く我々は自由の得難きことを感せしめらるゝことである、我々は次第次第に、學問上理論の指示せる如く、我々の行爲は全然因果の理法に支配せらるゝものなることを悟らさるゝことである、我々の現在の生活を以て全く過去の業因によれる果報であるとする、所謂業報と云ふことの信せらるゝは此位地である、サテ彌業報のことが充分に信せられ、我々自身の存在は全く過去の業因に對する果報にして、毫も自由なるべきものでないとなれば、我々は我々の自由の希望の滿足を自身以外に求めざるを得さることである、是に於てか、我々は理論上に於ける絶對無限なるものゝ實在を信し、其絶對無限の實在によりて始めて彼の自由の希望の滿足せらるゝことを信じ、其絶對無限が常に我々を懷抱し我々を擁護し我々を開導しつゝあることを感知するに至れば、我々は始めて正確なる自由の心念に達して、其心念の浮ぶ毎に、常に彼の絶對無限を思ひ、自身は只管其絶對無限の威德に乘托して業報界裡に安住することを得ることである、

之を略言するに、自由と云ふことは、我々の實際上の希望のみである、決して現實に得らるゝものではない、シカシ此

希望は非常に大切なる希望である、我々は此希望によりて以て自己の生活を反省熟察すべきである、我々が誠實に自由の希望によりて自己及自己の行爲を省察すれば、我々は所謂業報なるものを信ずるよりして、絶對無限の實在を信じ、其實在により自由の希望の滿足し得らるゝことを信じて、業報界裡に安心立命の幸樂を得ることである、

教會一夜

お茶の水人

せうことなきに一夜机に凭る友の至りていふ樣彼のムーデー博士の高弟トーレー博士が濠洲への途次日本へ立寄り今宵某教會に其說教ある筈行かぬかといふ、誘はるゝまゝに外套を被りて行く

七時の開會といふに甘分計り後れて開かれぬ二回の讃美歌三回の祈禱、聖書朗讀報告等說教は初めてなれはいと煩はしく思はれぬ、西洋人か片言なる日本語にて博士の紹介あり、かゝる事は寧ろ邦人の口より聞まはしと思ひぬこれも外邦管督の下にある不都合かや祈禱者某師の腕を壇に凭たせたるまゝ少し仰ける樣なといかにやと友は語る、

やがてトーレー博士は其肥滿せる體軀を起してヤオラ演壇の前に立てり其深く缺陷せる眼の異樣なる輝きを以て場内を見廻はる樣は威儀いと嚴かに感じぬしかも其瞑目拱手神を念せる所三歳の小兒も膝下に近くべう覺ゆ、白髮銀髯かゝる老軀を拉して異鄕方里瘴煙の巷に投せんとす、其熱誠眞乎欽羨すべからずや、想ふ昔大法一度東遷するや雪山山下凍死せる友を吊ふ　悲酸を嘗めて教法の祖國に詣でしものを又想ふ碧海に棹して深谷に攀ぢ空しく肉を猛獸の齶に委し白骨を荒野に曝せし勇猛求法の士を、嗚呼佛法の性命は如此にして保たれ佛教の光は如此にして傳はれりき興法布教の事豈容易ならんや顧て想へば今日我教界の衰頽萎微して宇介教法の重鎭たる士無も斯法の前途を想ふて轉た悚然たるもの之を久うす矣

トーレー博士の演說は今こゝに述べざらん唯其意氣の壯烈なる其言語の朗々なる眞摯なる態度と共に滿場を壓するを覺ふ昂底の調、力ある語尾、引例の適切なる材識の縱橫なる誠にプリーチャーとしての上乘たるを見受けぬ吾巽教徒を以て此間に介立し四周の零空氣、何となう吾をプレッスするかを疑はしむ吾にして若し佛陀を慕うの念なからしめば吾は早く立て『クリスト』を受け入れん』と(演題)を表白せしならん人を動かす如此にして眞に他の心中を開拓するに足る、

博士のかく吾を動かせしに拘はらず通禰者の說教調誠に嘔吐を催はすべかりし、吾由來說教調を厭ふかの宣教師一輩が(或僧侶も)泣くが如く訴ふるが如く畏るゝが如く威するが如く而して一種輕浮の調之を通して流るゝに至ては人をして耳を蔽ふを禁ぜざらしむ咄信仰の事しかく言ひ易からんや適ま以て其陋を示すに過ぎざるのみ說教に要するは熱誠のみ己先づ燒けて而して他を燒かんのみ、己先づ信じて他を信せしめのんみ博士と通譯者と兩々相對して吾をして感想轉に深からしめぬ、口耳の間此の熱さ劇しき信心を傳ふべしとなすか、

耶教と一關聯して賞贊すべきは其布教の熱心にぞある大道演舌に教會說教に其の祭り的なるは厭ふべきも其意氣は健氣といはさるべけんや此夜吾友W.C.にとて會堂を出づ門側の某止めといふ「マヅ少しを待ちなさいトーレー博士の說教がありますから……」と更に門口には救世軍の說教あり佇立せる人を誘ふに前言を以てす、唯其極信仰を强うるに至らずんば幸なり、

會堂の一夜は吾に至大なる教訓を與へたり吾は此意を以て我教界憂法の士に告ぐ佛教の布教や大に砂究を要すかゝる名士の我國に來るあらは行て其面影を察す亦他山の石に値せずや聞く嘗て布教師養成の擧あるや此等の士時々彼教會を見舞ひしと今健在なるや否や、

九時會堂を辭して出づれは孤月中空にかゝり夜氣將に氷らんとす、

一夜の感慨以て諸君に告ぐるに足らず、僕に於ては獻芹の微意のみ幸に諒せよ焉、

讀者之天地

遊三日誌　(承前)

悅目庵主人

五日午前九時榊原氏の許を辭して赤阪田町大谷派正法寺に赴いた(腕車は例に依て御聽走)此所にも法友會といふ有志會か有つて今回は此正法寺か會場に當てられたので有る晝夜二席宛の演說て隨分疲勞を感した丈は前日からの結果てゝも有らふ晝間の演說後御油眞教所留主居高田順道氏といふ七十有餘の老比丘が訪問して吳れて種々な奇談も有つたが餘り長いから今は略して置く夫から岡崎在中江村淨妙寺の住職天白氏の妹て天白花子といふ令孃か出て來られて四方山の談話から夫から岡崎地方の宗教談か有つた妙齡の婦人にしては云何にも感心した今日は岡崎の宗教者の設置に係る幼園て子供の教養をして居るとの事て有るか宗教家の令孃は斯ふいふ方面にも些と盡して貰ひ度紅粉に計り意を用ゐて居る時節でも有るなひ

余か正法寺に着するや否や寺主多田丁和氏か三卷の書籍を貸與して吳れた旅情を慰せよとの好意て有らふソコテ大阪て出版に成ゾた大日本名所圖錄の愛知縣の一部か有ツたから少し讀んて見た所か、三州寶飯郡の下に左の通りの記事か有ツた三州寶飯郡赤阪村大字西裏に長福寺といふ寺あり其上方山頂に女謠石あり一條天皇の御宇大江定基三河國守と成り本郡久保村に居るとき本村の長者宮路彌太郎に力藤と名くる一女あり定基深く之を愛す既にして將に京に歸らんとする時力藤別を惜み悲痛に堪えず終に舌を嚙て死す定基悼痛哀哭し死體を護ること七日乃ち之を山巓に葬り紀念の爲め墳墓を建てゝ去る即ち女謠石是なり

といふのて有るソコテ翌日多田氏に質問した所か夫は隣寺の山頂になる墳墓てすか唯形計りの石か据て有る丈け別に何ふも墓石といふ程の者もない昨日此所へ見にたのか長福寺の住職て有りますから歸途御出に成ツて一見なさいとの事て有ツたか時間か無いのて遂に往かす仕舞にしましたか元亨釋書抔に記載して有るとのことは少し違ふ樣に思ツたから一寸此の全文を掲けて參考に供したのて有るヲテ其宮路長者も今は跡形も無いらしい唯宮路山といふ可なり大きな山か有ツて晩秋の比にはドウダンの紅葉と見物に出掛る人も澤山て有るといふかさて是につけても長者ても大盡ても永持は仕ない者て有ると思ふと實に人世怪心細い所は無いと思はれる

六日午前十時正法寺より腕車を驅りて廣石淨寶寺へ移ツた此ては菩盆の廿四日に當るのと近所に珍らしく村芝居か有るのて青年盟は餘り來なかツた同日午後一時比から三席の說教と七時比から二席の演說をして翌朝又二席の說教を勸めた是て都合一週間無事に日數を經過したかサテ其效効はありや無しやと質問されては何とも答辯は出來ない

七日早朝の説教の終ると同時に同寺を退出して御油の停車場に赴いたが丁度十時發の上り列車に間に逐ッて直に乘車して新橋に向ふ心中自ら怠く樹々の間梅で流車も疾風の樣な速度で進行するので午後六時過比には平塚へ來た所が余が油斯をした間隙を狙ッて余の手提の中の個中物攫浚ッて下車したが有奴ッた平塚から流車が進行し始めた時分にヤット氣が附いたので何とも仕方が無い茅ヶ崎へ着車してから車掌に夫を告げたので電信を掛けて呉れたが一向分らない尤も惜しい程の物でないから頓着はせぬけれども個中物の中に御油からの乘車券が入れて有る夫が亡くなッたから随分落膽した新橋へ來て幾等説明しても証人が有ッても切符を失ッた已上は再度仕拂ふのが規則で有ると云て又復再度の仕拂をさせられた

余は敢へ流車で旅行もしたが今度ほど馬鹿を見た事は無いが内田氏の厄災に比すれば千萬分の一にも足らないと斯ふ考へて夫で腹の蟲を抑えさして仕舞ッた

(終)

新刊紹介

◎老川遺稿　本郷駒込　佛教清徒同志會

故老川古川勇君は紀伊の人、幼にして俊才の聞えたかく、曾て本願寺普通教校に學び、後東京に出て二三の學校に入りしが皆嵩に滿たずとして去り、明治廿五年に至りて遂に帝國大學選科に入り、廿八年大學の業を卒へ多年の蘊蓄胸に大に爲すあらんとして、不幸病覓に罹るゝ所となり、爾來播州須磨の地に退隱し、養痾五年其間病苦を忍びて筆を『中央公論』『佛教』『禪宗』等に執り絶えて倦むことを知らざりき、かくて明治三十二年十一月に及びて俄然病革まり、而して其月遂に起たざるに至る、これ君が經歷の概略なりとす、本書は即ち君が遺稿を蒐集したるものにして、文は政治、宗教、文學等あらゆる社會の方面に渉り一も剩す所なし、觀察奇警、議論縱横筆鋒犀利にしてよく君が磊落不羈風に慨世の志を抱き、餘憤淋漓として紙端に迸りたるを知るに足らむ、惜哉小過、一代の奇才空しく大志を齎して逝く、天下の恨事之に過ぐるものあらむや、蓋し君は多情多感の人なりき、「故數ヶ月子と余」の一篇の如き渾然たる居士が眞情を露はし一讀三嘆者人をして卷を措く能はざらしむ、尚青巒居士に寄せし「感涙の記」の如きは吾人多く讀むを欲せず、多情多感の人にあらずして誰か之を能せん、宜哉師に篤く、兄妹に篤く、朋友に篤きや

本書收むる所、君が十九より二十八歳世を辭するに至る迄に成れる百四の雄篇と十四の書簡を以てす、且つ添ゆるに宗演禪師、獄害上人の序文と君の略歴と肖像とを以てす、極めて親友ありし杉村縱横君の編にして、材料の精選并に慘裁に於て最も完備せるものと云ふべし、

一月五日　(劍　虹)

青柳有美著　◎有美臭　本郷四丁目　文明堂

著者は當代の一奇人なり、開卷第一目を惹くものは、著者に一男兒あり、長ずるに及んで役者たらしめんことを期す、著者一女兒あり、長ずるに及んで藝者たらしめんことを期す、この一文是なり、而して自ら稱して青柳有美は善鬼の子なり、と云ふ、奇人にあらずして何ぞや、蓋し著者當世に容れられざるを以て、諷刺世を弄ばんとするの嵩ならむ、此奇人の筆によりて社會の千態萬狀漏く實現せらる、其文豈奇ならざるを得んや、美か臭か吾等之を知らず、讀者諸君一書を繙ふて其美臭を判ぜよ(定價三十錢)

内田融著　◎モルモン宗　本郷四丁目　文明堂

昨年の宗教界を騒かせし者はモルモン宗の渡來なりき唯に宗教界のみならず社會問題として大に識者の論議する所となりき今や表面上多妻主義の抛棄と布教の

許可を以て一段落を告げしかゝきも實際上の問題は寧ろ今後にあり本書は内田文學士著す所にして紙數僅に百に充たざる袖珍本なりと雖も本宗の起原、歴史、教義、教會制度、米國政府との交渉、現今の教勢等序を逐ふて簡易明瞭に説述され一讀モルモン宗の大體を知るに足る敵を知らざるものは能く勝つものにあらず教界の士豫め一讀し置かば益する所少からざるべし(定價十五錢)

齋木仙酔著　◎文明主義　同

著者は如何なる人ぞ海老名氏の序文に曰く「氏は宗教の人なり少年なりしとき己に基督教に耳を傾げたる」人なり、また「氏は情の人なり」「潜心默思の人なり」「獨學自修の人なり」と此の如き氏は島田氏の序文に云ふ如く「心を宗教哲學に潜め」「頃日其所感を錄して一本書を作爲するの文明主義とは著者曰く「倫理に就て教育に就て將た哲學及ひ宗教に就て各時代の最高なる思想を採用するを原則とす」と此見地に立ちて審美主義生々主義または否定主義を論じ更にその哲理觀を述へ我國民性を説く等熱誠を以て流暢の筆を奔らし「所説首肯し難き點なきに非るも」頗る傾聽すべきものあり思を此に凝すもの一讀の値あるを覺る(定價廿五錢)

平田骨仙著　◎帝國海軍之危機　東京築地　『海』行所

雑誌『海』の新年附錄として出版されたる四六形百餘頁の一册子なり、著者は總論に於て英國と戦を挑ふせる我島帝國の國防は、重きを陸軍よりも海軍に置き、時宜に依ては陸軍を減殺しても海軍を擴張して露國のそれに匹敵する丈けにせずむば、國家の將來に於て寒心すべきものあるを説かれ、熱誠紙上に漲れ所論深く予輩の意の得たるものなり、第二章以下は著者が日露の頭腦戚を序述し海軍力の微弱なりし爲め、最終の勝は露國に占められ、空前の狂風を爲すに至りて筆を收め、須臾も海軍擴張の怠せにすべからざるを示さる、册子小なりと雖も一讀の値は確に有り、(實價二十錢)

老川遺稿出版費領收廣告(十一)

金三圓	東京	櫻井義肇君
金五十錢	同	麻田駒之助君
金五十錢	信濃	百瀬英一君
金二圓四十錢	獨逸	近角常觀君
金五十錢	越後	佐久間石太郎君
金一圓	東京	寶仙寺殿
金三圓	同	梅原融君
金三圓	同	大内青巒君
金一圓	同	本多辰次郎君
金一圓	紀伊	齋藤法宣君
金二圓	讃岐	高安博道君
金四十錢	紀伊	根來泰道君
金五十錢	同	川崎喜右衛門君
金一圓	同	中川富之助君
金五十錢	同	安川正正衛君
金一圓	同	竹原長之助君
金五十錢	同	辻作左衛門君
金五十錢	同	稲月島代君
金五十五錢	上總	大島賢照君
金三圓	東京	櫻井義肇君
金二圓	同	大橋敏君
金三十六錢(通計三圓三十六錢)	同	杉村廣太郎君

小計金二十五圓二十一錢也

通計總〆切高金貳百貳拾圓也

政教時報第七十二號　明治三十五年二月一日發行
明治三十一年十二月二十六日逓信省第三種郵便物認可
毎月二回一日十五日發行

鑛毒被害民救濟義捐金募集の檄

天災恐るべしとせば、人爲の災禍亦怖るべきものならずや、風震の罹災者憐むべしとせば、鑛毒の爲めに害を被むる水火に憐むべきものならずや、惟ふに足尾銅山鑛毒の害ありてより以來茲に廿年、洪水起る毎に被害の地を增し、渡良瀬川沿岸の一帶、漸く不毛の地たらんとして、其面積六萬町歩、此間に居住して害を被むる人民實に三十萬人、之を府縣に配すれば、東京、群馬、栃木、埼玉、茨城、千葉の六縣に亘り、之を村落に當つれば、新村にして百三十六ヶ村、舊村(字)にして八百餘村に及び、毒や之に止まらず、年と共に蔓延して漸く輩穀の下を浸さんとす、豈恐れて怖るべき事なからずや、而して此等被害民は、產ゝ傾け、家を失ひ、業務に離れ、一族離散して見る影もなき姿となり、人の養ふ能はざらんとするものを口にして辛ふじて露命をつなぎ、人の住むべきを家にして露を凌ぎ、親死すれども葬なし、況んや教育教養に於てをや、冠婚葬祭に於てをや、苦むも弔ふを得ず、子生るゝも慶ぶを得ず、病むも醫なく、人生の悲慘豈之に過るものあらんや

吾人同志茲に計りて鑛毒被害民救濟佛教有志會を興す、蓋し謂ゆる鑛毒問題に向て解決を試みんとするものにあらず、吾人は吾人が奉ずる佛教の本旨に基き、茲に廣く天下の仁人に訴へて直に被害民救濟の事に從はんとす、噫今や寒威凜烈凍風肌を裂かんとす、飽食暖衣、尚且つ耐ゆべからざるの感あり、憐れなる彼等無告の被害民今將た如何かせし乎、一念茲に及べば轉た同情の涙禁じかたし、哀れ世の仁人君子よ、仰ぎ願くば吾人と志を同うして、彼等被害民の爲に應分の義金を捐てられんことを

明治三十五年一月

(一) 義捐金は多少を論せず、有志者の芳志に任ず
(二) 義捐金募集の期限は來る三月三十一日迄とす
(三) 義捐金寄贈者の金額芳名は之を適宜新聞雜誌に掲げて領收證に代ふ
(四) 義捐金は下名宛に送られたし
(五) 義捐金は期限後適當の方法によりて有効なる救濟を爲す
(六) 本會事務所を東京芝區愛宕町一丁目十六番地佛教新聞社内に置く

東京本郷森川町一　大日本佛教徒同盟會

◉發行所　大日本佛教徒同盟會出版部
(電話番號本局二四三三番)

文學士　清澤滿之師序
文學士　近角常觀君著

信仰の餘滴

再版刻成

●定價金拾五錢●特別減價拾貳錢但郵稅不要●郵券代用一割增

本書は著者が、活火炎々たる自家の信念を表白したるものにして、其說く所卑近に流れず、高遠に失せず、平易の裡、紛糾錯雜せる人生問題を捉へ來りてよく之を調理し、讀者をして憂然胸中秘奧の琴線に觸れしむるものあるを覺えしむ、苟も信仰の飢を叫ぶの士は、必ず一讀せられんことをすゝむ、

一、宗教的同朋。
二、活ける懺悔。
三、外、柔にして、內、剛なるべし。
四、聲をきくべし、光を見るべし。
五、我を捨てむと欲すれば捨つる能はず。
六、佛の人格。
七、地を固く踏めざれど常に歩を進めよ。
八、信界に於ける監獄。
九、詩的信仰は一種の懈慢界なり。
一〇、宗教心は最も健全なる常識に外ならず。
一一、因果應報は宗教的自覺なり。
一二、相對世界の眞相。
一三、生きんが爲めに働くべからず、働かんが爲に生くべし。
一四、佛陀を近きに求めよ。
一五、信念に修養は實際問題に如くなし。

東京本郷森川町一番地
發行所　大日本佛教徒同盟會出版部